

一人ひとりの力を合わせて 石垣島白保集落ならではの 景観づくりを続けよう！

白保村ゆらていく憲章推進委員会〔沖縄県石垣市〕

設立年月 2007年2月
メンバー数 20名
代表者名 委員長 多宇 元
事務局長 上村 真仁
〒907-0242
沖縄県石垣市字白保118
WWF サンゴ礁保護研究センター・しらほサンゴ村内
TEL 0980-84-4135
FAX 0980-86-8865
kamimura@wwf.or.jp

わたしたちについて
石垣島白保集落に受け継がれる伝統的な助け合いの心“ゆいまーる”と勤勉、寛容な白保人氣質をあらわす“ゆらていく”の心で、白保村ゆらていく憲章に定められた村づくりを進めるために自治公民館に設置された組織です。

テーマ | “ゆいまーる”による伝統的な街並み景観の修復事業 その2

地域の概要 | 白保村（石垣市字白保）は、石垣市（人口4万9千人）の東部（石垣島の南東部）に位置する1,600人ほどが暮らしている集落である。村の東に広がるサンゴ礁は世界的に知られ、2007年には国立公園海中公園地区に指定されている。

1979年に発表された新石垣空港建設計画に端を発する一連の空港問題では、「賛成」「反対」で村を二分する困難な時代もあったが、1995年には一つにまとまり、村の団結に向けて公民館活動が進められている。

白保村は、石垣島一の農地面積を誇り、古くから農業・畜産業が盛んである。また、文化や芸能活動も活発で、公民館を中心に、豊年祭やハーリー祭、種子取祭などの伝統行事に取り組んでいる。石垣、福木、赤瓦などの伝統的な集落景観が多くの人々を魅了し、島外、特に他県からの移住者が増加している。新規住民が増加し、価値観やライフスタイルの多様化が進む中で、新たな村づくりが課題となっている。

活動の概要 | まちなみ景観、周辺農地の修景作業を居住者の協力により行った。集落の中で神事などに利用される2つの通り（カンヌミチとンマガミチ）については、石積み崩れた場所の修復、新たな石積みの実施、ブロック塀の緑化等を行った。また、農と緑の風景づくりとして小中学生による植栽等を行った。さらに、伝統的な景観保全の継承を願い、「ゆらていく文庫」を開設し、子ども達への読み聞かせ活動を実施した。



活動に至った理由や背景

豊かな自然や伝統的な景観が残る地域ですが、近代化、都市化の波は、この島にも及んでおり、ここ数年、島の暮らしや、景観が急速に変化しています。こうした中で、白保村の良さを守るとともに、村の資源を活かした地域活性化の必要性から、白保公民館では、2004年より全住民の参加と合意による村のビジョンづくりに着手し、2006年「白保村ゆらていく憲章[※]」を制定しました。白保村ゆらていく憲章推進委員会は、この「白保村ゆらていく憲章」を単なる絵に描いた餅に終わらせず、具体的な村づくりの推進を図るために公民館の専門委員会として設置されたものです。本委員会では、憲章の周知と村づくりを担う人材育成、集落内の景観保全、文化遺産の保護の推進、既存団体の取り組みの支援などに力を入れています。

本事業は、伝統的な景観を守りたいと思いながらも諦めてしまっている状況（多くの村民が、石垣をブロック塀に変えることや、落葉や落果の片付けが面倒な福木の防風林を伐採することは、時代の流れの中で仕方のないことであり、他人の財産について口出しすることは難しいと考えていました。）を何とかしなければ、と考え、企画したものです。第16回「住まいとコミュニティづくり活動助成」の支援を受けて実施した修景事業には、多くの村人が参加し、一人ひとりの行動が着実に村を変えていく力になるという手ごたえを感じることが出来ました。白保集落での景観地区指定の導入を2010年度に控え、より一層の景観への関心を喚起することを目的として、昨年度から引き続き『“ゆいまーる”による伝統的な街並み景観の修復事業その2』を実施しました。

※白保村ゆらていく憲章

与那岡から見渡す田園風景、魚湧く海、赤瓦、福木、石垣の残る集落 その中で受け継がれる伝統芸能、白保村の先輩たちが守り伝えてきた豊かな自然とともにある暮らしを守り、若者たちが夢と誇りを持って次世代を担うことのできる、海と緑と心をはぐくむ、おおらかな白保を目標としたゆらていく白保村づくりを推進します。



＜白保村づくり七箇条＞

- 一、白保の文化を守り、未来につなげます
- 一、世界一のサンゴ礁を守り、自然に根ざした暮らしを営みます
- 一、石垣、赤瓦、福木を愛し、きれいな街並みをつくります
- 一、恵まれた自然を活かし、村を支える地場産業を育成します
- 一、地域の教育力を高め、次世代を担うたくましい子どもを育てます
- 一、スポーツや健康づくりに励み、心と体の健やかな長寿の村をつくります
- 一、ゆらていくの心で団結し、平和で、安全な世界に誇れる白保村をつくります

活動内容

集落の中で、神事などの際に利用されるカンヌミチ（神の道）とンマガミチ（馬が道）と呼ばれる中心的な2つの通りを対象として、居住者に戸別に協力依頼を行い、石垣、福木*の街並みと調和した修景を行いました。

作業は、広く集落内にボランティア参加を呼びかけ、石積みの崩れた場所の修復、ブロック塀のないところへの石積みを行い、古いブロック塀については撤去して石積みを実施しました。また、新しいブロック塀については、つる性植物での緑化を行うために、ビパーツ*と呼ばれる植物の苗を配布しました。

さらに、ンマガミチ、カンヌミチで石積みできる場所が少なくなってきたことから、ブロック塀に石を貼り付け、石積みの景観を創造する“石タイル貼り”の技術開発と普及にも取り組みました。これは、ブロック塀と石をセメントでつなぎ合わせ、上に積み上げていくというものです。石積みに比べて技術と時間のかかる作業となりました。

※福木：フクギは、オトギリソウ科の常緑高木。昔から台風の風除けとして、屋敷の周りに植えられてきた。森の中の村と形容されるように緑の街並みを形づくってきたが、花や実が落ち、清掃が大変であることからコンクリート家屋の普及とともに集落内から姿を消しつつある。果実は、柿のような形で、ヤエヤマオオコウモリの餌になる。

※ビパーツ：ヒハツモドキは、コンショウ科のつる性の低木。島胡椒と言われ、八重山を代表する香辛料でもある。石垣に這わせて栽培することから、修景事業で積んだ石垣やブロック塀に這わせることで緑化を行っている。将来的に、多くの実が取れば白保産の香辛料として販売することなども視野に入れている。



見立てをする石工の棟梁



崩れた石積みを取り除く



ゆいまーるによる作業



ンマガミチの角は
アワイシ積み



お楽しみ お昼の炊き出し



積み上がりました

石積みの作業



“石タイル貼り”作業風景。石垣がブロック塀に変わった理由が、ハブ（毒蛇）が隙間に棲むため。でも、サンゴ石灰岩を砕いて、タイル代わりに貼り付ければ安心。伝統的な街並みと調和し、安全にも配慮した景観だ。モデルとなるこの壁は、大泊一夫棟梁のこだわりから石を一つずつ削りながら積み上げた手の込んだものとなった。



白保のシンボル三本木

また、まちなみ景観に加えて周辺農地の修景についても関心が高まってきたことから、農と緑の風景づくりとして、畑の周囲への糸芭蕉*や福木、ブツソウゲ*の植樹にも着手しています。

白保小学校の校庭には、アコウ*、ガジュマル*、テイゴ*のいずれも樹齢100年を超える巨樹があります。三本木と呼ばれ親しまれ、白保のシンボルとして白保公民館指定文化財にもなっているこの木の一本のテイゴが、テイゴヒメコバチの被害を受けていました。効果的な薬剤が開発されたということで、薬剤の樹幹注入を行いました。



糸芭蕉の植樹作業

※糸芭蕉：イトバショウは、バショウ科の植物。バナナの仲間であるが、食用とはならない。沖縄では、昔からイトバショウの茎の部分を縦に裂いて、繊維を利用していた。かつて、白保を流れる轟川沿いには、イトバショウが群生していたが、河川改良や土地改良事業によりイトバショウが見られなくなった。希少な資源となったイトバショウを増やし、芭蕉布などの伝統工芸を支えることが課題となっている。

※ブツソウゲ：アオイ科フヨウ属の低木。石垣島では、アカバナ（赤花）と呼ばれる。ハイビスカスのこと。畑の風除けや農地からの土砂流出のために畑の周囲に植えられることがある。本事業では、美しい花を咲かせることから農地の修景の意味でもブツソウゲの植樹を呼びかけている。

※アコウ：クワ科の半常緑高木。樹高は約10 - 20m。樹皮はきめ細かい。幹は分岐が多く、枝や幹から多数の気根を垂らし、岩や露頭などに張り付く。新芽は成長につれ色が赤などに変化し美しい。国内では、天然記念物に指定されている巨樹、古木も多数ある。

※ガジュマル：熱帯地方に分布するクワ科の常緑高木。樹高は20m。沖縄では、昔からその燃やした灰で灰汁をつくり沖縄そばの製麺に用いていた。ガジュマルの大木にはキジムナーという妖精が住んでいるといわれている。

※テイゴ：マメ科の落葉高木。春から初夏にかけて赤い花が咲く。八重山では、卒入学シーズンに咲く花として、本土の桜のような存在である。沖縄県の県花に指定されている。



月一回 絵本の読み聞かせ

新しい試みとしては、赤瓦、福木、石垣に親しみ、愛着を持ってその保全に未永く取り組んでもらうために、地域の親子を対象として「ゆらていく文庫」を開設しました。同文庫では、11月より、月一回福木の木の下での子ども達への読み聞かせを実施しました。

これらの活動に対して、2009年度は延べ200人以上の皆さんに参加してもらうことが出来ました。また、活動の内訳は、4軒の石積み(うち、1軒は公民館広場で、個人の住宅の8軒分ほどの距離)とピパーツの苗200本による緑化、石タイル貼りが1軒、農地の修景を3箇所、ゆらていく文庫での読み聞かせが5回、となっています。



活動の特徴など

今年度本事業の一環として取り組んだ白保公民館ゆらていく広場周囲の“ゆいまーる”による石積み作業。村のシンボルとなる施設の石積みということで多くの皆さんがボランティアで参加しました。整地や石運びなどの下準備を加えると、一週間ほどかかる大きな事業となりました。専門の石工の皆さんに仕事として発注した場合、数百万円は掛かる規模の石積みでしたが、今回は、重機代などの最低限の費用で石積みを行うことが出来ました。これも昨年度から継続して続けてきた取り組みが、村人の村への思いを高め、“ゆいまーる”という相互扶助の心を受けつぐことが出来た結果であると考えています。

また、今年は白保村ゆらていく憲章推進委員会の女性の皆さんのアイデアから、赤瓦、福木、石垣のそろった白保公民館の文化財*にも指定されている民家を開放し、「ゆらていく文庫」がスタートしました。このお宅は、昨年“ゆいまーる”で石垣の石積み作業を行ったのですが、多くの地域の皆さんの協力で石の積みなおしが出来たことから、地域への還元の意味もこめて開放していただけることとなりました。もともと、家主が読み聞かせを行うお母さんの会「福木の会」という活動を、続けておられる方であったことから「文庫」としました。しかしこの住居部分は、築年数の古い木造家屋ということで雨漏りがひどく、現在、その修復が課題となっています。地域での公共的な利用の積み重ねの中で、“ゆいまーる”による修復が出来ないか、今後模索していくこととなっています。

月一回の読み聞かせは、乳幼児から小学生までの多くの子ども達とお母さんが集う場となっています。遊び場の少ない白保集落では、小さい子どもを持つお母さんが出かける機会がありません。読み聞かせをする子育ての先輩たちと新米お母さんが知り合う場として、伝統的な集落景観に親しむだけでなく、コミュニティの結束を強める取り組みとして定着してきました。

※白保公民館の文化財

白保の文化や景観、自然などの貴重な村の財産ともいえる資源を次世代に受け継いでいくために、白保公民館として文化財指定し、村を挙げてその保全に取り組んでいくこととしている。



ンマガミチとカンヌミチの交差する新良幸永邸。平成21年度の最初の修景事業の記念撮影。子どもから80歳になるおじいまで、皆充実した笑顔です。この日は、段取りよく進んだため30mほどもある石垣の積み直しが午前中で終了。多くの参加者が集まっていたので、急速、もう一軒交渉し、ブロックを撤去して石積みを行った。



活動してよかったこと

“ゆいまーる”作業の合間に、炊き出しを参加者皆で囲んで、村への思いを語り合う場が持てたことが、この活動の大きな成果だと思います。

また、近くを通る子ども達にも声を掛け、作業に参加させ、炊き出しと一緒に食べさせる場面が多々ありました。白保村の大人たちが、「地域で子どもを育てる」、「村を支える子ども達をみんなで大事にする」姿に触れ、このように“ゆいまーる”の伝統が受け継がれていく瞬間に立ち会えたことは、とてもうれしいことでした。

NPO 交流会（2009年9月5日開催 第5回 住まいとコミュニティづくりNPO交流会）に参加する中で、財団の皆さんや選考委員の皆さん、他のNPOの皆さんから、白保での取り組みへの温かい激励のお言葉を頂戴し、メンバーの志気が高まりました。また、本事業を含む、白保村ゆらていく憲章に基づく村づくりについて、沖縄県公民館研究大会で発表する機会を得、優秀公民館表彰をいただきました。地道な取り組みを進

めていけば、必ず評価して

もらえる時が来るので、あきらめずに取り組みを続けていこうという

励みになりました。

課題など

昨年の教訓から夏場の暑い時期の作業を避けて、秋以降に修景事業を実施しましたが、年末年始や農繁期などのために思うように取り組みを進めることが出来ませんでした。特に、石タイル貼り付けは、“ゆいまーる”での実施を検討しましたが、キビ刈時期という農繁期にあたったために、参加が得られなかったことは残念でした。ただ、悪天候にも関わらず石工の皆さんが、頑張っていて、技術の確立とモデルとなる取り組みをしてくださったので、次年度以降、事業化を含めて、その普及を検討していきたいと考えています。

平成20年度に石積みを行ったンマガミチの金嶺邸(左側)と平成21年度に石タイル貼りを行った内原邸(右側)。毎年1月に行われる播種の神事「種子取り祭」に、この道を馬が駆け抜ける姿が楽しみだ。“ゆいまーる”による村づくりが目に見える成果となって現れたことで、持続的な地域づくりの輪が着実に広がっている手ごたえを感じる。



今後の予定

街並みの修景は、村づくりの重要な要素ではありませんが、あくまでも一部分でしかありません。今回の事業をきっかけとして、動き出した憲章に基づく村づくりを将来にわたり継続していくために、村づくりの専従スタッフを雇用することのできる事業の構築（景観や伝統文化の継承、自然環境の保全、一次産業の活性化、交流事業の企画運営等に対価を得る）と組織体制づくりに取り組みたいと考えています。

白保集落では、白保村ゆらていく憲章推進委員会の活動と並行して、様々な村づくりの取り組みが見られます。その一つは、白保魚湧く海保全協議会[※]の活動です。同協議会は、世界的に知られる白保のサンゴ礁の保全とその活用による地域の発展を目指して取り組んでいる任意団体です。また、白保の自然の恵みを使い、白保の伝統的な手技を用いた製品の直売を行う、白保日曜日市[※]が開催されています。いずれも白保の固有の資源を守り、活かすことで村づくりを進めていこうというのですが、持続的な運営体制の確立や組織化が課題になっています。

今後、憲章推進委員会が呼び掛けを行う中で、村づくりに取り組む既存の団体を連携・統合した持続的な村づくりに取り組むNPO法人等の組織化が次の目標です。

[※]白保魚湧く海保全協議会

率先してサンゴ礁の保全活動に取り組み、“サンゴ礁文化”とも言える白保集落の暮らしと海との関わりをエコツーリズムの資源として活用し、地域振興につなげる取り組みを実践している地域団体。2005年、海とともに暮らしてきた先人の生活文化に敬意を表し、伝統的なサンゴ礁の利用形態を維持・発展させるとともに、集落をあげて白保の海とその周辺の自然環境・生活環境の保全と再生を図り、適切な資源管理を進めることで地域の持続的な発展に寄与することを目的に、自治公民館、農業者、漁業者、民宿、シュノーケル業者など、白保関係者が設立した。

[※]白保日曜日

毎月第一、第三日曜日に白保のおいしい、おばあが作る伝統的な手業を用いた民具や郷土料理、白保産の農水産品などの直売を行う白保日曜日市が開催されている。同市は、2004年の白保ゆらていく祭りでの地産地食の取り組みを機に、“しらほサンゴ村”が呼びかけ2005年9月から始まったもの。2008年6月には、白保日曜日運営組合を設立し、広報、商品開発、イベント企画などを出品者が協力しながら実施する体制となった。この年の11月には離島フェア2008(主催:離島フェア開催実行委員会(18離島市町村・沖縄県・沖縄県離島振興協議会))より、島おこし奨励賞を受賞するなど、地域活性化に貢献している。

他のNPOに伝えたいこと

白保集落は、全国的に見ても旧来の地縁血縁のコミュニティの強い絆を残した地域だと言えます。その日々の営みの中には、現在、都市部のコミュニティ再生で、様々な試行されている活動が伝統として受け継がれています。“ゆいまーる”の心は、地域を元気にする源だと思います。これからも全国で連携・交流を図り、切磋琢磨しながらより良いコミュニティづくりに取り組んでいきましょう。